
クロネコ

anather R

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

クロネコ

【Nコード】

N0951E

【作者名】

another R

【あらすじ】

「影」を持つ人間。自分とは、少し違った人間。誰もが皆、「過去」を持つ。それが「鍵」になる。

第1章 「プロローグ」

第1章 「プロローグ」

誰にもある、微塵の殺人衝動の欠片。

優しさの裏には、冷たさがあるように、全てが表裏一体なんだ。
小さな壁に挟まれた、狭い世界でしかない。

眩い光が、辺りを照らし出す。

その光で朝になった事を知る。タバコを咥え、お気に入りのジッポ
ーで火を付ける。

次第に明るくなる空。疎ましい程に、晴れ渡っている。
雲ひとつない。紛れも無い快晴だ。

3月にくせに桜が咲くだけで、まだまだ肌寒い。
やっと冬が、終わりを告げたのに、まだこの世界に余韻を残してい
る。

俺は今、屋根の上にいる。

俺の好きな場所。ここに登るのは、危ないから駄目らしいけど、俺
には関係ない。

タバコをフィルター近くまで吸い、弾き捨てた。

高所恐怖症のくせに、高い所が好きだ。

ただただ、ボーッとしている内に時間が経った。

携帯の時刻は、7時を回っていた。学校に向かう準備をする。

俺はまだ、中坊だ。今は中2で、来月には中3に上がる。

ここ2ヶ月、俺は学校に行っていない。

転校したのが3学期の初めで、ちゃんと登校したのは、最初の1週間だけだ。

久しぶりに通る通学路。自分と同じ制服の奴がいっぱいいる。

これなら、少し遅刻気味にした方がよかったかな……。

そんな後悔も遅かった。でも、深く考えても仕方ない。学校に着けば、腐る程いるんだから。

でもやっぱり、時間を潰す事にした。

学校前に、大きなマンションがある。15階建てのマンションで、俺が遅刻する時は大概ここにいる。

まだ、住んでる人も少ない。だからこそ、ここがいい。

屋上への扉も何故か、壊れていて何時でも入れる。

自販機で買ったカフェ・ラテと、さっき買ったサラのタバコ。これだけで、1時間は耐えられる。

今日もいつものように、扉は開いていた。

開けた瞬間。涼やか風と共に、見慣れない姿があった。

同じ制服の女。年齢は……わからない。

俺は少し戸惑ってしまった。ここにくるような奴だから、何かあるんだと。

このマンションの屋上、いや全体は薄汚れている。

まるで、廃墟のように……。いかにも幽霊が出そうな程に。

その子が、生きてるのか死んでるのか……。それすら不安になりそうな程に……。

「君……よくここに来るの？」

話しかけられた。まあ、こんな場所だし、興味は湧くだろう……。

「ん。たぶん、自分よりよう来てる。」

「そう……。」彼女の視線は、また屋上から見える景色に戻った。

何より、悲しい目をしていた。

「自分さ……。うちの生徒か？」

彼女の横に行った。たぶん、幽霊の類では無さそうだ。

「そうよ……。今日転入するの。」

喋り方からして、大阪の人間では無い。関東だろう。

「何年？」

「中2よ。」

それから暫く、一問一答が続いた。

「あ……。遅刻しちゃう。」

それだけ言っと、足早に学校に向かった。

彼女は、不思議な感じがした。

なんていうか、猫のような……。鋭い刀？よく分からない。

ただ、周りを気にせず馬鹿笑いするような、最近の女の子とは少し違った感じだった。

品があり、清楚な雰囲気が漂っていた。

せっかくホット缶だったのに、彼女と話してるうちに忘れてしまった。

冷たくなった、元ホットのカフェ・ラテを飲む。

体の芯が冷えてきた。やっぱり、冬は末練があるらしい。

寒さに耐え切れず、タバコを啜える。

ジッポアの火で、手を温めながらタバコに火を灯す。

冷えた体に、メンソールの効いたタバコが別の意味で寒い感じになった。

携帯を確かめると、9時を回っていた。

「そろそろ、行こ。」屋上のベンチから腰を上げ、階段に向かった。1階に下りて、鏡でチェックをする。

このマンションは、知らず知らずのうちに汚れてしまう。顔も手も、制服も。綺麗なモノを汚く染めてしまう。

校門をよじ登り、トイレでうがいをして、タバコの臭いを取った。手も洗い、完璧に遅刻を成立させる。

俺は2 - 8だ。教室は2階だ。階段は物音を立てないように上がる。

途中で先生に出くわすと、それはそれは面倒だ。

出来るだけ静かに、自分の教室の前まで来た。

なんだか、賑やかだ。

ドアを開ける。その瞬間、俺に全員の視線が集まる。最初は視線が痛かったが、慣れればなんて事なかった。

「また、遅刻かぁ・・・。霞。」

「寝坊つす。」俺は、苗字で呼ばれるのが嫌いだ。だからと言って、「涼太」と下で呼ばれるのも、あまり好きじゃない。

自分の席に着く。と思ったが、自分の席が何処かわからない。
「何やってる？お前はあそこやる。」

先生が指差したのは、窓側の一番後ろだった。
ラッキーだ。あそこなら、存分に寝れる。席に着いてさっそく寝ようとした。

なのに、隣から声を掛けられた。

「さっきの人……だよね？」

「あつ……。屋上で……。」

さっきの子がいた。自分のクラスに。同じ8組に来たらしい。

「カスミ君って言うの？」

「まあ、な。」

また苗字で……。イラつくけど、転校早々から、怒るのは可哀想だから止めておいた。

元々、女の子には、基本キレない。どんなに酷くても。ただ、限度もある。

まあ、そんな事よりも、屋上での彼女と教室で見る彼女は違っていた。

静かな感じではなく。元気な感じというか……。

とにかく、彼女の印象は違っていた。

第1章 完。

第2章 「屋上」

第2章 「屋上」

真面目に授業を受ける。その生徒を、遠目に眺めながら時間を潰す。彼女とは、変な雰囲気になってしまい。

妙に居心地が悪い。なんなんだろう？このもどかしさは。

気が付いた時には、4現になっていた。

腹が減った。この感覚が、俺を現実に戻した。

4現は、国語らしい。

眼鏡を掛けた年増の女教師。名前は・・・知らない。

教室の風景に飽きた俺は、窓を開けてグラウンドを見渡す。

体育の授業中だった。

むさ苦しく雄叫びのような、男子のランニングと、甲高く発狂した
みたいな、女子の柔軟。

最近、何をしていても楽しくない。

元よりあの日を境に、楽しむも糞も無くなった。

「霞!!」

先生が怒鳴っている。俺を呼びながら・・・。

「なんすか・・・？」

「何回も呼ばすな！この問題、答えて。」

そんな怒らなくても、と思う。

だが、今時の先生は適当に聞き流せば、それで満足する。
ふと、黒板に目をやる。

そこには、大きく漢字が書かれていた。

「この読み方、答えて。」

『蒲公英』

どうやら、この女は俺を嘗めてるらしい。

漢字以外はまったく駄目だけど、漢字に掛かれば俺の右に出る者はいない。

そう自負している。

「タンポポ。」

「・・・よかったな・・・。」

なんだ。まるで、俺に恥を掻かせたいみたいな言い方だった。

どれだけ性格が悪いんだ・・・。

俺はもう、退屈過ぎて寝てしまった。

授業の終わりを告げるチャイムで、目を覚ました。

いや正確には、彼女に体を揺らされて起きた。

「授業、終わったよ。」優しく微笑んだ。

でも、俺の目には、それが「偽りの笑顔」にしか見えなかった。

昼食を摂る。何故か、彼女も着いてきた。

「で、なんか用？」

向かい合って、弁当を食べてる彼女に聞く。

「うつん。別に何も無い。」

僅かな沈黙が、二人の間を流れる。

「私、片桐美菜って言うの。よろしく。」

「ん。よろしく。」

彼女・・・いや、片桐はもったいぶって言った。

「そうじゃなくて、君の名前は？」

「ああ・・・。俺は霞涼太。」

そしてまた、沈黙が流れる。

俺は、最期に残しておいた卵焼きを口に入れ、立ち上がった。

グラウンドを眺める。元気な後輩が、思い思いに遊んでいる。

片桐もいつのまにか、横にいた。

少し距離を取る。自分のテリトリーに他人がいると、居心地が悪い。

「逃げないでよ。」

彼女は、少しずつ近付いてくる。

俺も少しずつ、遠のいていく。

「どうして逃げるの？」

「・・・苦手やねん。横に人がおるんわ・・・。」

間があく。まるで、ここにいないかのように。

「人が・・・嫌いなのか？」

「・・・ん。」・・・静かに、頷く。

絶えず流れる風は、俺達の全てを受け流すように、無常に流れていった。

妙に響くチャイムの音で、片桐は「またね。」と言って、階段へと歩き出した。

久しぶりに、本音を語った気がする。

変に疲れてしまった。このまま、家に帰ろう・・・。

俺は、鞆なんか放っておいて、学校を抜け出した。

第3章 「ベストポジション」

第3章 「ベストポジション」

次の日。

俺は、昨日6時には寝ていた為、早朝5時に目を覚ましてしまった。何もする事が無く。何もする気になれず。

ただ、まだ暗い虚空を眺める事しか、できなかった。

とりあえず俺は、お気に入りの場所に向かった。

マンションの6階、その階段を乗り越えれば、屋根に上れる。

屋根は石瓦だから、滑る事はなさそうだった。

上から見る風景は、俺の心を癒してくれる。

早朝の景色は、俺を、全てを始まりに導いてくれる。

1日の始まりを、ここで迎える。それが、俺の日課になっている。

たまに通り過ぎる人を見てみると、見覚えのある顔が見えた。

よく見ると、それは片桐だった。

この時の片桐は、学校の片桐ではなく。屋上で見た片桐だった。

俺に気付いたのか、手を軽く上に上げた。

俺も手を上げると、少し小走りになってマンションに入ってきた。

「どうやって、登ったの？」

制服姿の片桐が、少し息を切らせて聞いた。

「そこよじ登って、軽くジャンプしただけや。」

俺が言い終わる前に、片桐はもう階段の手摺を乗り越えていた。

「意外と、幅あるね。」

そう言いながらも、軽々とジャンプし、俺の横に座った。

片桐は、高い所は大丈夫らしい。俺は、まだ少し足が竦む。だが、屋根に上がればこっちの物だ。

「朝っぱらから、何の用なん？」

「別に何も無いよ。ただ、顔が見たかったの。」

もし、片桐に色気があり、何かを求めるような感じなら、顔が真っ赤になっていただろう。

俺には、見えてしまった。片桐の瞳の奥に、漆黒の闇よりも深く、そして大空よりも儚い哀しみを見た。

それが何なのかは、わからない。ただ、見えてしまった。

「タバコ・・・吸う？」

俺は、箱からタバコを出し、片桐に差し出した。

「ありがとう。」

俺の分のタバコも取り出し、啜えた。

ジッポーを取り出し、片桐のタバコを付けてから、自分のを付けた。

朝の風に、俺の髪が靡く。

今日は、学校には行かない。面倒くさい。フケた後の学校には、説教しか待ってない。

「鳥かご」こと「特別相談室」。素行の悪い生徒は「鳥かご」にて、拷問紛いの説教を受ける。

俺も髪的事で、よく呼び出され1時間以上、拷問を受けた。
でも、そんな事で髪を染め直す事はない。

俺は地毛だ。筋は通っている。だから、染め直す事はしない。
それに、そんなに茶色くもない。栗毛色。その表現がしっくりくる。

「今日は、学校行くの？」

片桐が、タバコを消しながら聞いてきた。

「ん。行かん。」俺もタバコを弾き飛ばし、大きく深呼吸した。

「今日はどうするん？」

街を見下ろしながら、聞いた。

「霞君の家、入りたい。」

唐突だ。いくらなんでも、いきなり過ぎる。

別に、部屋が汚いとか、女の子を入れるのが恥ずかしいと。そんな理由じゃないけど、何か嫌だった。

ふと、考える。片桐の哀しみ。それを知るのは、親しくなるのが一番早いんじゃないか、と。

「ええよ。」

「ありがとう。学校には、行きたくなかったの。」

そのあとすぐに、部屋に戻った。

この家に、他人を入れたのは初めてだった。

「お邪魔します。」片桐は、妙に畏まりながら家にあがった。

「あれ？おかあさんとかは？」

不思議そうに聞いてきた。まあ、無理もないだろう、俺は单身ここに引っ越してきたんだから。

「別居してるから、俺一人やで。」

俺は片桐を適当に座らせ、キッチンに入った。

いつもは、自分の為にだけ使う物を、二人分用意した。

俺が好きな紅茶だ。有名なメーカーではないが、深い味わいのある紅茶だ。

トレイに紅茶と砂糖、ミルクを乗せ、リビングに持っていった。

「あつ、ありがとう。」充電器に挿したままの、携帯を開き時間を確かめる。

7時半。中途半端な時間だ。何をするにしても。

「それにしても、案外片付いてるね。A型？」

「そやで。」

まるで、探検にでも来たみたいに、見物している。

俺は必要以上に物を置かないし、趣味以外はほとんどやる事がない。2LDKの家。マイルームって言うのも変だが、ベッドが置いてあり24インチのプラズマテレビとシリアス系の小説に埋め尽くされた本棚。

パソコンと、オーディオの置いてある机、箆笥、ソファ。あとは、殺風景な物だ。

これで、生活が出来る分の物しか、置いていない。

片桐の質問に一問一答しながら、時間を潰していった。

第4章 「闇に消える、漆黒の猫」

第4章 「闇に消える、漆黒の猫」

順調に時間を潰し、気が付いた時には12時を回っていた。

「片桐。飯どうするん？」

まだ飽きずに、部屋を探検している片桐に言った。

「500円あるから、弁当買おうと思ってる。」

こつちを見もせずに、500円をポケットから出し、また直した。

そして、何かの写真を持ってリビングに戻ってきた。

「ねえ、霞君。この猫って、飼ってたの？」

「・・・それに、触らんとってくれ。」

「え？でも、可愛いし。名前教えてよ。」

「ええから。それ直してき・・・。」

俺の声色が変わった事に、気付いた片桐は、

小さく「ごめんなさい。」と言って、写真を直しにいった。

出来れば、知られたくなかった。

片桐を知ろうとするくせに、自分の事を知られたくない。

これは、矛盾しているのだろうか？

触れられたくない「過去」

それは、誰だって持つてると思う。

「霞君……。ごめんね。」

片桐が、戻ってきてからまた謝った。自分に嫌悪感を抱いた。過去を引きずり、それを必死に隠そうとする。

「片桐……。俺も悪かった……。」

沈黙が流れた。そして、静寂を破ったのは、片桐だった。

「もし……。もし、よかつたら、何があつたのか聞かせてほしいの・
・。」

「……。かなり、重い話やぞ？」

片桐は、少し考えてから、「それでも、聞かせて……。」「と言った。

俺も話そうか迷った。

だが、片桐の発した言葉で、決心が着いた。

「私たち、もう友達でしょ？」

俺は静かに、写真の猫の話をした。

――

俺には、小5の頃から黒猫を飼っていた。名前は、クロだ。飼っていたといっても、正確には面倒を見ていただけだ。

毎日餌をやり、全てを猫に注ぎ込んだ。

それは、中学に入ってからも続き、その所為にする訳じゃないが、学校も遅刻しがちになっていた。

田舎の学校と言うのは、生真面目で少し調子に乗っている。

俺は、クラスだけではなく。

学校全員の輦轡を買っていた。そして、イジメられるようになった。俺を傷付けるなら、いくらでも我慢できた。

何をされても、「覚えとけよ！」って仕返しの準備をする事が出来た。

だが、ある日。

いつも、クロのいる場所にいなかった。

俺の心は一気に、不安で埋め尽くされた。

「クロに何かあったら・・・。」

「あいつらは、やりかねない。」

自然と、拳を握る力は増していき、指が真っ赤になった。結局、見つからなかった。

しかたなく、学校に行った。そして、知りたくない事実を知る事になった。

それは、昼休みのトイレ。粹がった連中のたまり場だ。その前を通り過ぎた時、嘲笑う声が聞こえてきた。

「あの黒猫。おもしろかったな・・・w」

「動物虐待とか、ひどいわあw」

この辺で、黒猫と言えば、クロしかない・・・。

大きな絶望感と共に、俺は憎悪に染められた。

トイレに溜まっていた3人組を、一人ずつ殴っていった。

憎悪に染まった俺は、どんな攻撃も効かなかった。

一人は、顎が外れ、鼻からは鼻血を垂らし、中坊のくせに泣き喚いでいた。

もうひとりには、殴った衝撃で頭を強く打ち、病院に運ばれた。最後のひとりは、1発殴っただけで、逃げられた。

泣き喚かれた所為もあって、先生が駆けつけた。

どんなに倒れても、起こしてまた殴る。それを見た先生は、当然のごとく俺を叱った。

そいつらと、その親に謝れって言われたけど、俺は謝らないの一点張りで、結局謝ってない。

俺は、そんな事より、クロが気になっていた。

学校を抜け出し、クロを探した。見つけたのは、神社の裏だった。・・・以前、クロだったモノが横たわっていた。

それがクロだとわかったのは、漆黒の毛並みがあったから・・・。俺は泣き崩れた。クロだったモノを抱きしめて・・・。

俺の復讐は終わらなかった。

あいつらに、ここまでする根性があるとは、思えなかった。

他に共犯、もしくは首謀者がいる筈だ。

証明はできない確証。

だが、その復讐を実行する事はなかった。

その事件の後、すぐに転校が決まった。

そして、ここに来た。

俺は、全てを信用できなかった。
だが、片桐・・・あいつだけは、信頼できた。
影がある。俺と同じように・・・。
哀しみを知った目。孤独を知った目。俺と似ているからこそ、片桐
に本音が言えた。

言い終えた俺は、目に涙を溜めていた。
片桐は、静かに泣いていた。

第5章 「復讐の鎮魂歌」

第5章 「復讐の鎮魂歌」

「霞君は・・・まだ、復讐するの？」

片桐との間に、妙に距離を感じた。静かな時間が流れる。

「ああ・・・まだ、やり残した事があるんや。」

やり残した事。俺の計画の最終段階は、そこにある。

片桐も俺も、それ以上口を開かなかった。

雨が降ってきた。部屋中に雨が、地面にぶつかる音が響いている。

シトシトなのか、パラパラなのか、分からなくなってきた。

辺りが、闇に包まれた。部屋が真っ暗だ。

俺は立ち上がり、電気を付けた。

「私・・・この家にいてもいい？」

「好きなだけ、おつたらええ。」

下心はないが、自分にそっくりな奴を、家に帰りたくない片桐を、追い出せなかった。

いつの間にか、雨はやんでいた。

雲の合間から、光の帯が差し込む。

俺はやっと

「友達」を見つける事が出来た。

それでも、忘れない。

クロ……。お前を殺した奴は、俺が殺してやる。

俺は、復讐者だ。

「霞君、私の事ミナって、呼んで。」

「……。わかった。じゃあミナ、俺は涼太でええよ。」

静かに笑う。

8時、俺が作った晩飯を、テレビを見ながら食べた。

「料理上手だね。」

「暇な時、作ってるからな。」

料理も、俺の趣味の一つだ。

和洋折衷、一通り作れる。あの日までは、料理人になる事が夢だった。

それを志し、様々な勉強をした。

いままでは、そんな事に熱中していた。

その後、ミナとの楽しい会話をした。そう友達同士の会話を。

テレビから、バラエティー丸出しの効果音が、聞こえてくる。

なんだか、心が休まる気がした。

第6章 「墓参り」

第6章 「墓参り」

次の日、俺は徹夜明けのボーっとした頭を、風呂で清めた。

時計は、8時を示している。

久しぶりに帰ろうと思う。故郷へ。元我が家へ。

家を出て、屋根に登った。朝の一服。風呂上がりの一服も乙なものだ。

制服姿を見掛けない。

ああ、そういえば土曜だった。

俺は、タバコを吸い終えてから屋根を下りた

俺の頭の地図で、駅を目指す。

正確ではないが、的確だ。

いつも「屋根回り」の時、散策してるから迷う事はない。

案外簡単に、駅に入れた。でも、人でごった返していた。

何故だ。土曜なのに。

その答えは、掲示板にデカデカと飾ってあった。

どうやら、隣街で規模の大きな祭があるらしい。

「漢の紅蓮祭！！」

ポスターの男は、血まみれで笑顔を作っていた。

正直、サディストとして、血が騒いだ。

まあ、墓参りに行くんだ。そんな遊びなんか、やってる暇はない。

だが、人込みは苦手だ。

だから、待ち合い室で時間を潰した。

途中おばあちゃんに、質問責めされたが「え？あ、まあそうっす。」で流した。

しばらくして、人が疎らになった。

それを見計らい、電車に乗る。

予定通り、空席に座りI podで、音楽を勤しむ。
ポルノのラテン調に酔いながら。

1時間程で、目的地に着いた。

久しぶりの故郷の地。

懐かしきはあるが、再会の楽しみは微塵もない。

それにしても懐かしい。

10程歩くと、大きく寂れた日本家屋がそびえ立っていた。

「黒陵院」

忌ま忌ましい表札だ。

「珍しいですね。里帰りですか？」
後ろから声がした。

「いつ以来や？お前と口聞くんわ・・・。」

振り返える。懐かしい顔がある。

「久しぶりですね。黒陵院白蓮様。」

「残念。今は、霞涼太や。」

まあ、こいつはわざとだろう。

「参りましょう。ご自宅へ。」

そして俺は、元我が家で誘われた。

俺は、気になってた事を聞いた。

「剥奪者のお前がなんで、ここに出入り出来るんや？」

剥奪者。それは、黒陵院の名を剥奪された者。いわば反逆者だ。

「あなたと違って、私は真面目なんですよ。今では、黒陵院の専属メイドです。」

霞瑠衣。彼女の名前だ。俺に「霞」をくれた張本人。

俺に名をくれた。反逆者に名をくれた恩人だ。

「へえ、そらすごいな・・・。」

「軽はずみな言動は、止めてくださいね。私が叱られますから。」

昔と変わらず、燐とした瞳で闇を見つめている。

俺は父親の前に、連れてこられた。

「何の用だ？」

逢ってすぐに、これだ。こいつは相変わらずだ。

「別に。ただ、死に顔でも拝もうと思ってな。」

俺も相変わらずだ。こいつを前にすると、戦闘モードに入ってしまう。

だから、今までここに帰ろうとは思えなかった。

「霞様。不謹慎ですよ。」

しばらく、睨み合いが続いた。

が、今回は俺の負けだ。あの腐った顔を見るだけで、殺意が湧いてくる。

「ルイ。どつか、案内してや。」

俺は、ここから抜け出すために、ルイに話を振った。
そして、ルイの返事を待たずに歩き出した。

この屋敷は、日差しが届かない。たかだか、10分の話なのに物凄く長く感じた。

ひさしぶりに、ルイと並んで歩く。

幼馴染とは、縁深いものだ。中2・・・いや、4月だからもう中3だ。

この年になっても、ルイと歩くだけで、落ち着く。

好きとかそういうのじゃない。ただ、一緒にいた。
それだけだ。

黒陵院宗家の俺と、分家のルイ。

ただの主従関係じゃない。俺が余所余所しい態度を叱って。
それ以来の付き合いだ。

「どこへ案内しましょうか？」

ルイが昔に戻ったようだ。違うのは、完璧になった敬語とポーカーフェイスだけだ。

「もういいやろ？何回も言わせんなよ。ルイ。」

それを聞いて、ルイもあの頃に戻ったようだ。

ただ、嬉しいとか楽しいはない。それは、ルイも俺も変わらなかった。

正直な話、敬語は苦手だ。そして、人間4ヶ月も別の場所に住めば、故郷を忘れてしまう。

俺だけかもしれない・・・。

でも、俺には断片的な物しか残ってない。

だから案内人が必要だった。

「クロのいる場所や。ここに来た理由はそれだけや。」

「やっぱり、白蓮は変わらないんやね・・・。」

感慨深げに、卒業アルバムを眺めているかのように、静かに言った。

「行こつか。クロちゃんのいるところ。」

俺は、ルイが見える位置を保ち、着いていった。

そして、あの日のけじめの、宣戦布告をしに行った。

30分程、歩いただろうか・・・。

見覚えのある、海を臨む大きな崖。ここから落ちれば、確実に死ぬだろう。

土の盛り上がった場所。クロの亡骸が眠る場所。

俺が作った墓標には「クロ」と、しっかり書いてある。

墓前には、クロが好きだった。勿忘草が置いてあった。

「お前か？」直感的に聞いた。

「うん……。」「ルイは、泣いていた。

もらい泣き。復讐を果たすまで、枯らせた筈の涙が涙腺を熱くさせる。

駄目だ。まだ、復讐は終わらない。我慢だ。

静かに手を合わせて、クロの幸運を祈る。

第7章 「ワインレッドの海」

第7章 「ワインレッドの海」

「帰ろ……。」

ルイが静かに行動を始めた。

「……。お前、先帰つてろ。」

静寂が、流れた。

ルイも俺がやろうとしてる事が分かってしまったんだろう。

「うん……。死んじゃ駄目よ。」

俺は歩き出す。後ろは振り返らない。

ルイとは反対の道に行く。

着いた場所は、懐かしい制服が見える。

俺の中学校だ。元が付くけど……。

拳が次第に強く握られる。爪の先が真っ赤になっている。

同級生を見つけた。俺をいじめてた奴の下っ端だ。

不本意ではあるが、余興を楽しむ。そんな感じで、そいつを校舎裏に連れて行った。

簡単だった。こいつらは、俺が何もしないから、調子に乗ってただけだった。

醜い様だ。俺を馬鹿にして大笑いしてた奴の顔だ。

思い出した。それと同時に凄まじい怒りが芽生えた。

すでに、気絶した奴を更に殴る。
殴る度に血飛沫が舞う。そして、返り血として俺の顔や服にこびり付く。

快感。まさに、サディストだ。

5分後には、小さな赤い海が誕生した。

俺は、まだ納まらない。この怒りだけは。
全員、殺してやる。

二人目のターゲットは、すぐに見つかった。

後ろから首を絞め、意識が飛んだ所を学校沿いの川に落としてやった。

落ちた時に、鼻を打って川が薄い赤に染める。

それを見るだけ、俺は疼く。そして、新たなターゲットを見つける。

先生だ。いじめを容認して、俺から逃げた男。

俺は、ロッカーからはみ出た、箒を折った。尖った矛先は、先生の全身を突き破った。

騒ぎ声がつるさかった。だから、喉元を狙う。

刺さった瞬間に、先生は身動きを取らなくなった。

また、小さな赤い海の完成。

俺は、1時間以上学校で、暴れまわった。

もうターゲットもいないので、こいつらへの復讐は終わりだ。

残すは、黒陵院凰蓮だけ。

いずれこうなる事は、分かっていた。

俺は、血だらけの上着を捨て、黒のロングTシャツ一枚になった。

Gパンは、返り血を浴びて、所々が赤黒い。

まあ、気にしなければいい。

黒陵院家に向かう足取りは、遅くなく速くなく、確実な一歩で進んだ。

第8章 「けじめ」

第8章 「けじめ」

一歩一歩、足を運ぶ。

血が滴る拳を、強く握りしめる。

どれくらいたっただろうか？

奴が、鳳蓮が真犯人だと、気付いたのは……。あいつは、最期に取っておいた。いや、正直あいつが犯人だと「認めた」なかった。

でも、今は。今だから、あいつを殺せる。

春の暖かに目覚めた蝉の音が、時雨のように降り注いでいる。

少し汗を掻いた。暑いのも、寒いのも嫌いだ。

黄昏。それは、まさにこんな感じなんだろう。

俺の最期……。俺は満ち足りた人生を送れただろうか……。？

俺は、楽しむだけ楽しんで、そして……。安らかに眠りたかった。

黒陵院。

黒幕が、偉そうにタバコを吸う。

睨み合ったまま、静寂が時を支配する。

「お前が、考える事は変わらないな……。」

父、鳳蓮が懐かしむように言った。

「遺言は、それだけか・・・？」

ポケットから、綺麗に輝く黒い刃を取り出した。

「ほお、闇猫か・・・。」

闇猫。黒陵院家が、剥奪者の証として、それを持たせる黒刀だ。

何故、そんなものを渡されるのかは、分からない。ただ、その禍々しい輝きが、何を意味するかはわかった。

「覚悟は、とうの昔に出来ている。」

鳳蓮は、立ち上がった。そして、俺の前で止まった。

「あの日・・・以来か？」

静かに笑った。そして、俺は刃を心臓に突き刺した。
スローモーションに、鳳蓮の体が床に沈む。

一人になった部屋には、蝉がうるさく鳴いていた。

そこに、ルイが現れた。

「やっぱり、白蓮は・・・変わらないね。」

闇猫を引き抜き、血を拭ってから俺に差し出した。

「ああ・・・。」

疲れた。自分の人生に。

でも、もう終わる。復讐者は、今日で終わる。

「何処に行くの？」

俺は、答えずに黒陵院を出た。そして、クロの墓前に来た。

「クロ。もうすぐ、お前と逢えるな……。」
おれは「けじめ」を付けた。

今までの自分に。これからの自分に。

闇猫を自分の胸に、立てた。

すぐに、景色は淡く消えていった。

息絶える寸前、確かに見えた。

クロが、俺の傷を舐めてくれた。

痛みとは、違った意味で涙が流れた。

「クロ……。ありがとな……。」
」

最終章 「後片付け」

最終章 「後片付け」

彼が、死んだ。自殺した。

何故か傷口は、完全に止血してあったらしい。

それでも、心臓を破れて即死だったらしい。彼の手には、漆黒の毛が絡んでいたらしい。

私は思う。クロちゃん。あの黒猫が涼太を守ってくれたんだ、と。

2日後。涼太の葬式が行われた。

参列者は、黒陵院と名乗る集団と私と涼太の元中学校の生徒数人で行われた。

泣いてる人は、いなかった。私以外。

お焼香を上げ、私は涼太の死に顔を見た。

死んでる。そんな風には、見えなかった。

安らかに眠り、クロちゃんに会える。そんな日を待ちわびた顔だ。

あの日、涼太がいなくなった日。私はすぐにわかった。

「やり残した事がある。」

それを、実行したんだ・・・。

私宛の置手紙に「今までありがとう。」と書かれていた。

心配になった私は、涼太に電話した。

出たのは、涼太ではなく。「ルイ」と名乗った。

ルイさんに、ここの場所を教えてもらい。すぐに向かった。

彼の故郷。異様な気もしたが、気にせず進んだ。

そして、私は見てしまった……。

彼が……涼太が、血塗れで立っていた。その奥には、綺麗な女の子もいた。

傍らには、父親らしき人物が倒れていて、血溜まりを作っていた。暫く立ち尽くした後、涼太は歩き出した。

涼太は、崖の方まで登り、お墓の前で止まった。

「クロ。もうすぐ、逢えるな……。」

その瞬間、彼は血に塗れた黒い刀を、自分に刺した。

止めたかった。でも、止められなかった。

何かに邪魔されているように。「行くな。」って言われているように。

「クロ……ありがとな……。」

そう言っ、死んでいった。

体全体から力が抜けて、地面に崩れ落ちた。

私はどうする事も出来ず、ただ泣いていた。

「あなたは？」いきなり、後ろから声を掛けられた。さっき見た綺麗な女の子だ。

「あ、あの、涼太の・・・友達です。」

「ああ、白蓮様の。私、霞瑠衣です。白蓮様とは、幼馴染にあたります。」

「霞・・・？白・・・蓮？」私は涼太の友達と言ったはずだ。

「お友達なら、知っておられた方がいいと思います。彼の全てを。」
ルイさんは、この人だったんだ。

それから、ルイさんは、彼について教えてくれた。

「黒陵院宗家、元20代目当主。黒陵院白蓮様。それが、霞涼太の本当の名前です。」

いきなりで、頭が付いていけなかった。黒陵院って？20代目当主？私の頭は、どんどんこんがらがっていく。

改めて、ゆっくり言っただけだった。

そこで、分かった。彼は偽名を使っていたのか・・・。

それでも、何故偽名なんて使ったろう？かつこ悪い名前・・・って訳でもないし・・・。

でも、今はそんな事より、彼が死んだと言う事が、何より衝撃だった。

「白・・・涼太様より、手紙を預かっています。どうぞ。」

私は手紙を受け取った。A5の用紙を4つ折りにした手紙だった。

『ミナへ

たぶん、これを読んだ頃には、俺は死んでると思う。

親父を殺して、俺も死のうと決めた。

これが、間違っているんか、正しいんか。それはわからんけど。クロの仇や。刺し違えてでも、親父を殺す。

不本意やけど、お前に後片付けを頼みたい……。

俺が死んだ事を、この街で広めてほしい。親父を殺した事も、全部。

それが、俺の最期の復讐や。涼太としての復讐と、白蓮としての復讐や。

これが、正真正銘。最期になる。

ほんまに、今までありがとう。

涼太

これが彼の「けじめ」なんだと思った。

そして、彼の後で私が「後片付け」をする。

彼の為になら、私はなんだって出来る。

だって、好きだから……。

そして、私は彼の言うとおり、この村全ての人間に「彼の死」を告げた。

お墓は、クロちゃんの横に立てた。

「クロ」と「霞涼太」。二つの名が並んだ。

彼に愛された猫と、愛故に復讐者に染まった彼。哀れだろうか？ 醜いだろうか？

私には「純粹な愛」。そう。可憐に輝いて見えた。

第0章 「あとがき」

第0章 「あとがき」

「クロネコ」お楽しみいただけたでしょうか？
どうも。作者の「Rを告ぐ者」です。

この物語は、完全なフィクションであり、実際に登場する人物、団体は一切関係ありません。

この作品には、少し思い入れがあります。

私は、犬や猫が好きなんです。得に黒猫が大好きなんです。と言う事で、黒猫を題材に小説を書きました。その完成形がこれです。

多少分かりにくい箇所や、深く入り込み過ぎた場所があると思います。

まあ、中坊の小説。と思って、見てくれたら十分です。

自分は、シリアスな小説が好きで、どうしてもシリアス傾向になつてしまいます。

コミカル好きの方には、重すぎると思います。

まあ、今更言ったところで、遅いと思いますが・・・。

それと、もう一つ。

ジャンルについてなんですが、「シリアス」という分類がなかったので、

一応「ホラー」にしていますが、実際そこまで怖くないと思います。

第8章 「ワインレッドの海」では、多少グロテスクではありますがご了承ください。

「復讐」という運命を抱えた少年の心境と、ただその人が「好き」と想う少女。

その二人のすれ違い。運命の逆流。それを感じてくれたら嬉しいと思います。

それでは、改めて「クロネコ」をお読みいただき、ありがとうございます。

これからは、外伝なんかも書こうと思っています。

楽しみしててください。

では、いつの日か。また・・・。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0951e/>

クロネコ

2010年10月15日22時30分発行